

全学共通教育についての自己点検・評価報告書（教育部会用）

教育部会名：人間形成と思想  
部会長名：齊藤 誠一  
作成者名：齊藤 誠一

概要（2000 字）

**実施体制：**平成 24（2012）年度の本教育部会は、大学教育推進機構 3 名、人文学研究科 10 名、国際文化学研究科 4 名、人間発達環境学研究科 17 名、保健学研究科 4 名、海事科学研究科 1 名、の計 39 名から構成され、教育部会長 1 名（人間発達環境学研究科）、幹事 2 名（人文学研究科、国際文化学研究科）が世話役になり、運営されている。

**開講科目：**教養原論として「哲学」（4 コマ）、「行為と規範」（3 コマ）、「科学技術と倫理」（2 コマ）、「論理学」（2 コマ）、「心理学」（4 コマ）、「心と行動」（6 コマ）、「教育学」（3 コマ）、「教育と人間形成」（3 コマ）の 8 科目 27 コマ、共通専門基礎科目として「倫理学 S」（2 コマ）、「心理学 S」（2 コマ）の 2 科目 4 コマ、全体で 10 科目 31 コマが開講された。

**実施状況：**「哲学」は人文学研究科と国際文化学研究科の教員により、「行為と規範」は国際文化学研究科の教員により、「科学技術と倫理」は人文学研究科の教員と非常勤講師により、「心理学」「心と行動」「心理学 S」は大学教育推進機構、国際文化学研究科、人間発達環境学研究科、海事科学研究科、保健学研究科の教員により、「教育学」は人間発達環境学研究科の教員により、「教育と人間形成」は大学教育推進機構の教員により、「論理学」「論理学 S」は非常勤講師により行われた。

**教育の現状とその評価：**

①**教育内容：**従前の通り「人間は、文化の中で、自分なりの考え方を獲得しながら、人間として形成されていく」プロセスに関わる問題を、「人間形成と思想」という大枠の下に多角的に取り上げた講義を行うことにより、「教養原論」「専門基礎科目」の教育課程編成上の位置づけと教育目的に沿った講義を提供していると評価できる。また、一昨年度より現代の科学技術社会における倫理性の意義を深める目的で開講された「科学技術と倫理」も当該教育部会担当の科目として定着し、一定の受講生を得ている。さらに、本年度より「論理学 I / II」「心理学 I / II」が「倫理学 S」「心理学 S」に変更され、これまでの I と II および教養原論の「論理学」「心理学」との差異化が図られ、専門基礎科目に見合う授業内容に改善された。

②**教育方法：**長年の懸案であった大規模クラスの解消は、教養原論登録抽選により最大で 200 名クラス規模となり、ほぼ実現されているが、これには昨年度も指摘したようにまだ 2 つの問題を残されている。ひとつは、抽選から漏れたために自分が学びたい科目を聴講できない学生と、抽選により受講登録はしたものの履修取消をする学生が発生することである。いずれの科目も GPA 対象科目であり、履修取消が可能であるため、本当に学びたい学生が学べる仕組み作りを今後とも検討される必要がある。2 つめは、200 名以下になったとはいえ、前期 15 コマのうち 150～200 名規模 8 コマをはじめ 13 コマが 100 名以上の規模に、後期 12 コマのうち 150～200 名規模 5 コマをはじめ 9 コマが 100 名以上規模となっている。こうしたことは、本教育部会設定の授業科目への関心の高さを示すものであり、さらに受講生の学習ニーズを応えていくことが重要といえるが、100 名以上の受講生に対してきめ細かい対応をしていくことには困難を伴わざるをえない。一方向的な単調な授業にならない工夫として VTR、DVD、パワーポイント等の視聴覚教材の使用に加え、コメントペーパー、ミニレポートとそれに対するフィードバック、少人数グループに分けてのディスカッションなど授

業の質保証のための努力が各担当者により行われている。一方、遅刻早退者、私語、携帯電話の使用、他教科の予習など当該授業外活動、居眠りなど個々の教員の努力だけでは解決できないこともあり、T Aを活用し机間巡視などによる一斉指導の中での個別指導なども検討すべきであるかもしれない。

③授業成果：学生の授業評価では全般的に肯定的回答がなされており、授業中のコメントペーパーなど提出物等から判断しても、おおむね教育の成果や効果があがっているといえる。

#### まとめと今後の課題

まず、本教育部会担当科目全般については、一部には大規模クラスにならざるを得ない状況にありながらも、各担当者の工夫と努力により、各科目の目的に応じた適切な授業が行われている。また、時代的要請に応える授業科目として「科学技術と倫理」が一昨年度設定され、本教育部会の特色を生かした授業として定着してきたものと評価できる。現在、1コマが環境倫理学を専門とする教員により、もう1コマが哲学を専門とする非常勤講師により担当されており、複数の視点からの展開となり、受講生に選択の幅を広げている。さらに、専門基礎科目である「論理学Ⅰ／論理学Ⅱ」が「論理学S」に、「心理学Ⅰ／Ⅱ」が「心理学S」に変更され、内容の実質改善がなされた。

一方、大規模クラスの授業では、担当者の努力や工夫だけでは解決できない問題もあり、教室設備などハードの改善だけではなく、授業規模に応じたT Aの配分などを行い、受講生に対する個別的教育サービスも検討されるべき課題と言える。

様式2（続き）

### 項目・観点ごとの記述

#### 基準5 教育内容及び方法

5-1【教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）が明確に定められ、それに基づいて教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切であること。】

5-1-③： 教育課程の編成又は授業科目の内容において、学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に配慮しているか。

（観点に係る状況）

担当教員のうち、25名から「はい」、1名から「いいえ」の回答を得ており、ほとんどの授業で学生の多様なニーズ、学術の発展動向等に配慮しているといえる。「いいえ」と回答した1名の授業が基礎的な哲学的内容であるため、こうした配慮が容易にはしにくいものと思われる。

#### 根拠資料

シラバス、配付資料、最近改訂された教科書、コメントペーパー

5-2【教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等が整備されていること。】

5-2-①： 教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法が採用されているか。

(観点に係る状況)

担当教員のうち、23名から「はい」、2名から「いいえ」の回答を得ており、授業で配付資料、視覚映像メディアが利用され、適切な学習指導法が採用されているといえる。また、多くの授業で100名以上の受講生となっているため、対話型の授業展開が難しいが、小テストやアンケートに対して次回授業フィードバックしたり、少人数に分けてディスカッションをさせたりするなど新たな工夫も見られている。

根拠資料

シラバス、配付資料、ビデオやDVDなど視覚映像メディア、演習シート

5-2-②： 単位の実質化への配慮がなされているか。

(観点に係る状況)

担当教員のうち、24名から「はい」、2名から「いいえ」の回答を得ており、シラバスや配付資料により授業内容や目標を明確にした上で受講を求めたり、授業中のテストやアンケートなどを実施し、授業への集中度を高めたりするなど単位の実質化への配慮がなされているといえる。ただ、授業外での学習の促進は少数にとどまっており、今後の課題と言える。

根拠資料

シラバス、配付資料、コメントペーパー、授業テスト、宿題、レポート課題

5-2-③： 適切なシラバスが作成され、活用されているか。

(観点に係る状況)

担当教員のうち、24名から「はい」の回答を得ており、おおむね適切なシラバスが作成され、活用されているといえる。

根拠資料

シラバス、学生授業評価結果

5-2-④： 基礎学力不足の学生への配慮等が行われているか。

(観点に係る状況)

組織的な対応はなされていないが、各教員において授業後の質問やオフィスアワーにより自発的に申告してくる学生に対しては適切に対応しているものと思われる。ただ、客観的に基礎学力不足学生を把握し、積極的な関与を行うためには、診断的評価の実施、小テストなど形成評価の実施、個々の学生の成績状況に関する情報の担当教員への提供が必要となろう。

根拠資料

シラバス、小テスト、アンケート、オフィスアワー

**5-3 【学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）が明確に定められ、それに照らして、成績評価や単位認定、卒業認定が適切に実施され、有効なものになっていること。】**

5-3-②： 成績評価基準が策定され、学生に周知されており、その基準に従って、成績評価、単位認定が適切に実施されているか。

（観点に係る状況）

担当教員のうち、24名から「はい」、2名「いいえ」の回答を得ており、策定された成績評価基準がシラバス、あるいは初回授業時のオリエンテーションなどで学生に周知されているといえる。しかしながら、その基準に従って、成績評価がなされているかの検証は一部教員による成績分布による検討にとどまっており、今後は確かなエビデンスによる検証が求められると言えよう。

根拠資料

シラバス、第1回授業時でのオリエンテーション、配付資料、成績分布

5-3-③： 成績評価等の客観性、厳格性を担保するための措置が講じられているか。

（観点に係る状況）

5-3-②の回答、担当教員からの報告などから判断する限り、シラバスへの評価基準公開、試験答案、出席簿などにより評価がなされており、一定の客観性と厳格性は担保されていると思われる。

根拠資料

試験答案、出席簿、シラバス

**基準6 学習成果**

**6-1 【教育の目的や養成しようとする人材像に照らして、学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について、学習成果が上がっていること。】**

6-1-②： 学習の達成度や満足度に関する学生からの意見聴取の結果等から判断して、学習成果が上がっているか。

（観点に係る状況）

担当教員のうち、20名から「はい」、4名から「いいえ」の回答を得ており、おおむね学習成果はあがっているものといえる。ただ、学生授業評価については回答数を増やし、安定した結果を得る必要もあろう。

根拠資料

学生授業評価、授業アンケート

**基準7 施設・設備及び学生支援**

**7-1 【教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備等が整備され、有効に活用さ**

れていること。】

7-1-④： 自主的学習環境が十分に整備され、効果的に利用されているか。  
(観点に係る状況)

おおむね自発的学習環境は整備されているものと思われる。

根拠資料

図書館、大学教育推進機構および各学部の自習室など

**7-2【学生への履修指導が適切に行われていること。また、学習、課外活動、生活や就職、経済面での援助等に関する相談・助言、支援が適切に行われていること。】**

7-2-①： 授業科目、専門、専攻の選択の際のガイダンスが適切に実施されているか。  
(観点に係る状況)

担当教員のうち、12名から「はい」の回答を得ているにとどまっているが、履修指導については学部での履修計画に依存するため、積極的な関与は難しく、当該授業内容が個々の学生にとって適切な履修かどうかシラバス、授業でのオリエンテーションで判断させざるを得ない。

根拠資料

配付資料、第1回授業資料、シラバス、各学部の学生便覧

7-2-②： 学習支援に関する学生のニーズが適切に把握されており、学習相談、助言、支援が適切に行われているか。

また、特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への学習支援を適切に行うことのできる状況にあり、必要に応じて学習支援が行われているか。

(観点に係る状況)

担当教員のうち、15名から「はい」、6名から「いいえ」の回答を得ており、肯定回答はオフィスアワーやメールによる質問受け付けの提示などにより、学生からの要請に対して対応して、学習相談などを行っているといえる。ただし、教員の側から積極的に学生にニーズを把握するまでには至っていないものと思われ、事前に診断的評価によりレディネスやニーズを把握する工夫も必要かもしれない、また、特別な支援を必要とされる学生が受講生にどうかは授業だけを担当する教員には把握するのが困難であり、事前に当該学生の情報などを周知されることが必要である。

根拠資料

シラバス、コメントペーパー